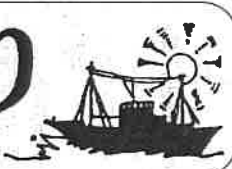


# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館 ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会  
〒136-0081 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

## 「私と第五福竜丸」

三月十八日の夜、川崎市の宮前市民文化会館では、元第五福竜丸の乗組員、大石又七さんを招き、「マグロ塚への想い」と題して話を伺った。

宮前市民文化会館とは、川崎市宮前区に住む学者、教員、会社員などの主にOB達、地域の文化活動に取り組み、気楽に作った集まりであり、年六回ほど講師を招いて文化講座を開くとともに、時には映画会などの催しも行っている。

私は、現在、この組織の運営委員をしているが、今年は、海底に沈んだ第五福竜丸のエンジンが、三二年ぶりに展示館に戻ってきた記念すべき年でもあり、三月の文化講座として、大石さんに講演をお願いしたのである。

この日の市民館の会議室に集まった人は、およそ二〇人ほどであったが、若い人はもちろん、年配者も、第五福竜丸の事件について詳しく記憶している人はほとんど居なかった。それだけに、四六年前の被爆体験を、まるで昨日の出来事のように語る大石さんの気迫に満ちた話に、全員が熱心に耳をかたむけた。

中でも私には、ピキニ事件直後日本政府が、原子力をエネルギーとして使う技術の提供をアメリカから受けるため、第五福竜丸の乗組員からの賠償問題をあ

## 長沼 士朗

まいにし、見舞金で政治決着がはかられたという話が、特に印象に残った。

この話は、現在私達が原子力の平和利用によって受けている恩恵が、スタートのところで必ずしも人命を大切にすることという考えから生まれたものでないことを物語っている。

去年の九月、茨城県東海村の核燃料施設で、ウランの核分裂による臨界事故が発生したが、原子力による恩恵は、これから、いつそれが私達の生命を脅かす存在に変わるかもしれない、いつも肝に銘じていた方がよさそうである。

私は、NHKで三〇年間ほどディレクターとしてテレビ番組を作る仕事をしたが、第五福竜丸との最初の出会い、昭和四四年三月、先輩の工藤敏樹さんが作った「廃船」というテレビドキュメンタリーであった。

この番組は、東京・夢の島にゴミとして捨てられた第五福竜丸の流転の軌跡を克明に記録し、非人道的な核兵器の存在を厳しく糾弾した、記念碑的な作品であった。

平成三年七月には、この工藤さんの協力を得て、大石さんが「死の灰を背負って」という本を出版した。このとき私は、朝のニュース番組を担当しており、大石さんをスタジオに招いて、自分の半

に参加、日本原水協代表理事などをつとめました。第五福竜丸保存運動にも当初から協力され、一九七三年には『おーい、まっしろふね』を発

## 伊東さんの生と仕事の重みを感じる

山村 茂雄

「マグロ塚」設置される  
大石又七さんが築地にと願ってきた「マグロ塚」が四月十四日、第五福竜丸展示館横に設置された。大石さんはじめ「作る会」の人々の手で心こめて設置された塚は船とともに、死の灰の恐ろしさを静かに訴えつづけます。



展示館東入口横に設置された「マグロ塚」

子運動などに奔走、その後児童文学に携わり、『つるのつとむ』、『おこりじぞう』、『荒地地野ばら』などの文学作品を残しました。また早くから原水協禁止運動

協評議員のお一人として長く、協力をいただいた伊東さん(日本原水協被害者団体協議会代表委員・山梨大学前学長名誉教授)が三月三日亡くなりました。享年七〇歳でした。三月六日山梨大学、日本被爆協などの発起人による「故伊東先生感謝の集い」が甲府市で行われました。

伊東さんは中二三年のとき、爆心から五キロ離れた東洋工業に学徒動員中、被爆しました。救済活動や肉親を捜すなど、市内を歩き数えきれないほどの被爆者の死を目撃しました。一橋大学在学中から、原水協禁止運動に参加、国立市の被爆者の会の結成、一九五八年の東友会(東京の被爆者団体)の結成にあたりました。七〇年日本被爆協事務局局長、八一年から日本被爆協代表委員でした。早くから地域での被爆者生活調査をすすめ、被爆者の要求を理論化する基礎をつくりました。六六年に

に参加、日本原水協代表理事などをつとめました。第五福竜丸保存運動にも当初から協力され、一九七三年には『おーい、まっしろふね』を発

は「原爆被害の特質と被爆者援護法の要求」の策定、七三年の「被爆者援護法のための要求骨子」では、被爆者の要求する「三つのほしゅう」(被害の補償、いのち・くらし・こころの保障、核兵器のない平和の保証)を定式化するなど被爆者運動の理論的、実践的指導者でした。

私が伊東さんとお知り合いになるのは六一年に出版された日本原水協専門委員会編「原水協被害者白書」かくされた真実」編集のころです。「白書」が明らかにした「原爆死」者の推計は、その後の「死亡者数」の基礎資料となりましたが、伊東さんは、第六章「被爆者と社会保障」を大江志乃夫さんと執筆されています。七七年の「NGO被爆問題シンポジウム」では伊東さんは国際準備委員会の事務局代表の一人としてシンポジウムの運営にあたり、また調査や作業文書の作成にもあたりました。

シンポジウム前段として行われた七六年の国連要請には、代表団代表の一人として参加、私も一緒に参加しました。近くは第五福竜丸のエンジン保存の運

表。協会評議員でした。【お詫び】前号一面の筆者名等誤りがありました。正しくは、松尾高志、大阪経済法科大学客員研究員です。お詫びし訂正いたします。

動では「都民運動」の世話人団体代表として、船体との再会実現につくされました。

長いお付き合いのなかで学び交わしたことのあれこれ、被爆者と非被爆者の被爆認識の違い、それを越えての理解と連帯のありようなど、いくつもの思い出があります。伊東さんの著書『原爆被害者の半世紀』(岩波ブックレット八八年刊)は、広島に刻まれた「原爆死」の意味から書き起こされていますが、この本の最後はこう記されています。

「二世紀のなかには、ほとんどの被爆者はこの世にいないでしょう。そのとき核兵器が廃絶されていれば……あの広島に刻まれた「原爆死」の文字は「核兵器廃絶と真の平和のために死んだ」とそのときの若者たちに読んでもらえる思いです。それは、そう読むことができます。若者、墓に刻まれた死者たちとが共有できる幸せなのです」

「二世紀を見ずに逝った伊東さん、多くの論じたいことを残して。」(第五福竜丸平和協合理事)

生を本にしたかった心境を語ってもらった。この半年後に工藤さんが、病気でこの世を去る。

その後私は、定年でNHKを退職し現在は関連会社で働いているが、去年の夏、仲間とやっている同人誌に、工藤さんのことや大石さんのことを書きたいと思い、久しぶりに大石さんと連絡をとった。

大石さんは今、核の被害が再び起きないことを願って、原爆マグロが埋められた築地の魚市場の一角に「マグロ塚」を建てる運動に取り組んでいる。そのため、平成九年から全国の子ども達に「〇円募金を呼びかけ、平成一年には、伊予の青石に「マグロ塚」と文字を刻んだ石碑も完成した。

しかし築地の魚市場は現在再整備が検討されており、現在この碑を築地に配置する見通しはまったく立っていない。

今年に入って、暫定的に第五福竜丸展示館の横に展示することが東京都との話し合いでまとまり、この四月一日に大石さんたちの手で設置作業が行われた。私は、科学者でも平和運動家でもないが、これからも、第五福竜丸や「マグロ塚」のことを通して核の問題に関心を持っていきたいと思っている。

風化せず世紀を越えよ原爆誌  
テレビ番組のタイトルから刺激をうけて、最近作った一句である。  
(元NHK勤務)

